



みづな名画シアター

1/19(木) ※入替なし

おかしな奴

13:00~



監督：沢島 忠、脚本：鈴木 尚之
出演：渥美 清、三田 佳子、南田 洋子 ほか
1963年 東映(東京)

喜劇 急行列車

15:05~



監督：瀬川 昌治、脚本：舟橋 和郎
出演：渥美 清、佐久間 良子、楠 トシエ ほか
1967年 東映

不朽の名作 いま再び

1/20(金) ※入替なし

吹けば飛ぶよな男だが

13:00~



脚本・監督：山田 洋次、脚本：森崎 東
出演：なべ おさみ、緑 魔子、犬塚 弘 ほか
1968年 松竹

あゝ軍歌

14:45~



脚本・監督：前田 陽一、脚本：満友 敬司
出演：フランキー堺、財津 一郎 ほか
1970年 松竹

◆映像によっては、音声聞き取りにくい場合があります。

2023年1月19日(木) 20日(金)

13:00開映(12:30開場)

川西市 みづなホール

阪急・能勢電鉄川西能勢口駅東口下車・徒歩5分
JR川西池田駅下車・東へ徒歩12分

入場料＜全席自由席＞：1日券500円

※就学前のお子様の同伴・入場はお断りいたします。

主催：(公財)川西市文化・スポーツ振興財団、国立映画アーカイブ

特別協力：文化庁、(社)日本映画製作者連盟、全国興行生活衛生同業組合連合会、(株)松竹



ご予約・お問い合わせ：川西市みづなホール072-740-1117 〒666-0015 川西市小花2-7-2

前売券発売所：みづなホール072-740-1117、ローソンチケット Lコード：56017

※ホールに駐車場はありませんので、電車・バスをご利用ください。前売にて完売の場合は、当日券はありませんので、ご了承ください。

み

つ

な

か

名

画

シ

ア

タ

ー

日本映画の量産時代に登場した監督たちが、喜劇映画のなかで新たな挑戦を試みた秀作を紹介

1月19日(木)

おかしな奴

13:00~14:50

1963年 東映(東京)
白黒・シネマスコープ 110分監督／沢島 忠
脚本／鈴木 尚之
撮影／藤井 静
照明／原田 政重出演／渥美 清、三田 佳子、南田 洋子
加藤 嘉、清川 虹子、田中 邦衛
佐藤 慶、石山健二郎、十朱 久雄
渡辺 篤、春風亭柳朝

自ら「珍顔」を名乗り、戦後の落語界で爆発的な人気を誇った風変わりな落語家、三遊亭歌笑(1917~50)の短い人生を描いた東映作品。歌笑を演じた渥美清にとって、この映画は『拝啓天皇陛下様』(1963、野村芳太郎監督)やアフリカを舞台にした『ブワナ・トシの歌』(1965、羽仁進監督)と並んで「寅さん」以前の代表作と言えるだろう。監督の沢島忠は東映の中でも新しい世代に属し、中村錦之助(後に萬屋錦之介)主演の時代劇「一心太助」シリーズ(1958~63)など、フットワークの軽い演出で知られる。実在の歌笑はナンセンスな笑いを得意としたことで知られたが、沢島監督はあえてこの落語家の生涯を、滑稽な笑いばかりでなく、夫婦愛を軸にそこはかとない哀しみを込めて描いている。やがて名作『飢餓海峡』(1964、内田吐夢監督)を執筆することになる脚本家鈴木尚之や、数々の黒澤明作品に音楽を提供した作曲家佐藤勝など、スタッフ陣の豪華さでも注目に値するだろう。

喜劇 急行列車

15:05~16:35

1967年 東映
カラー・シネマスコープ 90分監督／瀬川 昌治
脚本／舟橋 和郎
撮影／飯村 雅彦
照明／元持 秀雄出演／渥美 清、佐久間良子、楠 トシエ
鈴木やすし、大原 麗子、江原真二郎
根岸 明美、桜 京美、小沢 昭一
三遊亭歌奴、三原 葉子

1967年から翌68年にかけて東映で3本が製作された喜劇シリーズの第1作。旧国鉄の協力を得て、東京と九州を結ぶ寝台特急で巻き起こる悲喜こもごもの騒動を描き、おっちょこちょいだが人情味あふれるベテラン車掌を渥美清が好演している。監督はプログラム・ピクチャーの名手・瀬川昌治。本シリーズの成功を機に松竹に招かれ、1968年にフランキー堺主演の『喜劇 大安旅行』を発表。こちらも1972年の『喜劇 快感旅行』まで計11本を数える人気シリーズとなったほか、1970年代以降はテレビで「赤い」シリーズや「スチュワーデス物語」を手掛けたことでも知られる。一方の渥美清は1968年にテレビドラマ「男はつらいよ」そして翌69年の映画化で演じた「フーテンの寅」こと車寅次郎役が絶大な人気を博し、以来26年間に48作を記録する国民的大シリーズに成長してゆく。

1月20日(金)

吹けば飛ぶよな男だが

13:00~14:31

1968年 松竹
カラー・シネマスコープ 91分脚本・監督／山田 洋次
脚本／森崎 東
撮影／高羽 哲夫出演／なべおさみ、緑 魔子、犬塚 弘
芦屋 小雁、佐藤蛾次郎、有島 一郎
ミヤコ蝶々、小沢 昭一

大阪の街を舞台に、やくざの幹部に憧れるチンピラと九州から出てきた家出娘の恋模様を描いた山田洋次監督の秀作コメディ。最初チンピラの三郎は家出娘花子をだまして金を稼ごうとするが、善意のかたまりのような花子の無垢さに打たれ、やがて心のつながりを感じてゆく。当時、若手コメディアンで成長株であったなべおさみと、一風変わった存在感を放つ女優緑魔子が不器用な「連帯」で結ばれた二人を好演したほか、ミヤコ蝶々、犬塚弘といった助演組、さらには小沢昭一による活弁調の解説もこの作品に独特の彩りを添えている。山田監督は、この作品に込めたのは「アホなチンピラ」のおかしさであると後に述べたが、その一方でほろ苦い結末の描き方も魅力となっている。脚本はほとんど森崎東が執筆しているが、社会の決まり事から外れた世界で生きる人々への共感、後の「フーテンの寅」像にもつながるだろう。「キネマ旬報」ベストテン第10位。

あゝ軍歌

14:45~16:14

1970年 松竹
カラー・シネマスコープ 89分脚本・監督／前田 陽一
脚本／満友 敬司
原作／早坂 暁出演／フランキー堺、財津 一郎
倍賞千恵子、北林 谷栄、城野 ゆき
風間恵美子、大村 崑、人見 明
上田吉二郎

戦争中、精神障害の真似をしてわざと野戦病院に入り、死を逃れた二人の男は、その後、戦没者をまつる神社へ遺族を案内する怪しげな観光ガイドとして暮らしていた。その男たちのもとへお婆さん、未亡人、少女、ヒッピー風の男が次々と迷い込んでくる奇妙な生活を描いたこの作品は、1960年代以降の松竹喜劇を支えた前田陽一監督の代表作である。そこに息づく屈折した批判精神には師匠の渋谷実監督の影響も垣間見える。その作風について、主演のフランキー堺は、「旅行」シリーズの瀬川昌治監督の「軽喜劇」に対する、前田作品の「重喜劇性」と説明して敬意を表した。劇中の所々に軍歌が挿入されて作品のリズムを築いているが、この映画で「歌」が作品の血肉となっているように、前田監督は歌謡映画にも定評があり、『進め！ジャガーズ 敵前上陸』(1968)などのヒット作を送り出した。

◆映像によっては、音声聞き取りにくい場合があります。